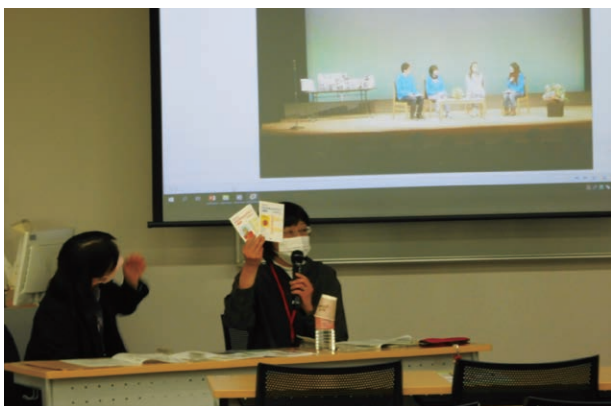




2022年度 JLS の会 — 卒業生が語る図書館の仕事 —

東京都日野市立図書館は、日本の公共図書館のサービスモデルをつくりあげた図書館として、図書館学課程の授業の中でもしばしば取り上げられます。2022年度のJLSの会では、卒業生の中から、日野市立図書館に勤務されている中島美奈子さんに、日野市立図書館とご担当の業務についてお話をいただきました。
(2022年11月5日：本学渋谷キャンパスにおける対面開催)



— 現在、中島さんが働いている図書館を紹介してください。

日野市はあまり大きな町ではないものの、歴史のあるまちです。現在、中央図書館と六つの分館、移動図書館で運営しています。

中央図書館は、中央線豊田駅の南口から徒歩5、6分の所にあります。私が現在、勤めているのは、豊田駅の北口にある多摩平図書館(分館)です。1階が図書館、2階が男女平等推進センター、地域子ども家庭支援センターなど、3階が児童館で、子どもが集まる施設になっています。市内で最も利用の多い図書館です。

近隣にはショッピングモールがあり、マンションの並ぶ住宅街です。また古くからある多摩平団地も、現在は建て替えられ、かなりの人口を擁しています。利用者層としては、ファミリー層が非常に多いです。多摩平図書館は、昔の多摩平児童図書館が母体になっているので、子どもの本が多いです。蔵

書数は12万冊、敷地は856平方メートルです。

— 入職してからの担当業務を教えてください。

私は日野市の図書館に入職し、最初は中央図書館を担当しました。その後に平山図書館、多摩平図書館、中央図書館、日野図書館と移動図書館を担当しました。今回の多摩平図書館は二度目の担当で、2年目になります。基本的に児童奉仕を長らく担当してきました。

— どのぐらいの期間で担当部署が変わるのですか。

5年か3年ほどです。本と人をつなぐ仕事をずっと行ってきましたが、インターネットが出てきて利用者が自分で検索し、ピンポイントで本を出せることが増え、図書館の仕事も変わってきたと思った時期もありました。2006年「第1次日野市子ども読書活動推進計画」策定を担当しました。日野市立図書館は児童サービスを手厚く行ってきましたが、策定の際、青少年世代へのサービスが足りないということで、まずは多摩平図書館にヤングコーナーを設置しました。2009年に文部科学省の補助金を受け、「日野ヤングスタッフ☆ドリームスクラム事業」を行いました。(図書)リストを作る、講演会をするという内容で募集をしたところ、15人の高校生・大学生が集まってくれました。そのメンバーが、企画を立て、呼びたい作家にアタックし、実際に講演会を行いました。児童文学作家の松原秀行さんをお呼びしたときは、クイズやパズルをメインにした作品を作る方だったので、小学生が考えたクイズを会場の人と一

緒に解くという企画をスタッフが立てました。

― 日野ヤングスタッフには実践女子大学の学生もいるのですか。

当時2名が実践女子大学の方でした。(ヤングスタッフの事業では)辻村深月さんもお呼びしました。初めて直木賞の候補になったときです。壇上で一緒に対談をしてもらいました。その後も、現在までヤングスタッフ事業は続いています。日野キャンパスの常磐祭でも、ヤングスタッフが展示などを行っています。12月にはビブリオバトルを行う予定です。

― 今日いただいた資料の中に多くのブックリストがありました。

毎年、子ども向けに夏リストを夏休み前に出しています。例えば今年のテーマが動物に決まると、動物に関するお薦めの本を皆で集めます。各自が割り当てられた本を読み、アノテーションという紹介文を書き、AからCまでの評価をします。評価があまりに低いと、リストから外します。

― どのぐらいの時間をかけているのですか。

ひと月半かな。絵本やノンフィクションなどテーマに合った本を紹介します。『どんなほんがすき？ はじめてのひとり読みにおすすめの本』は、絵本からよみものに入ろうとしたときに、「何を讀んだらいいか」とよく聞かれるので、字が大きな本や絵本でも楽しいものがあるということを紹介するために作ったリストです。

― リストの表紙にかわいい犬がいます。

これは私が実家で飼っていた犬です。何かの表紙に描いたら、これが独り歩きし、現在ではいろいろな所で使っています。

― 『読書パスポート』は面白いと思います。

この『読書パスポート』は読書記録になっています。読んだ本を書いてきてもらおうと、この1、2、3というところに貼るシールを渡しています。最後まで行くと、大きなゴールシールを貼り、折り紙などで作った小さなプレゼントをあげる流れになっています。最近『BOOK JOURNEY PASSPORT』ができました。これは自分の感想を書き込めるもので、先ほどよりもお兄さん、お姉さん向けに作ったもの

です。『0、1、2歳児わくわく絵本』は、図書館と保育園の、現場の先生の声を聞き、一緒に相談しながら作ったものです。『3、4、5歳児』は図書館、保育園、幼稚園職員の先生方と一緒に作りました。

選書についてです。本は出版社が作り、その後、書店に行くまでの間に取次という会社があります。その取次の会社が、図書館に見本の本を送ってくれるサービスを、私たちは見計らいと呼んでいます。その見計らいの中で、私たちは実際に本を選んでいきます。見計らいの本と一緒に、出版された本のリストが来るので、それもチェックしながら本を買っていきます。子どもの本は、なるべく実物を見て選びます。また独りよがりにならないように、複数の職員で見えています。

― 受け入れた本全てに目を通していただけますか。

はい。読んでおくと、紹介するときの熱量も違い、それが伝わると思っています。

― 学校とボランティア向けの話もお願いします。

日野市の図書館の中で長く続けている事業の一つがおはなし会、もう一つが学校訪問です。市内全小学校三年生のクラスを訪問し、図書館の利用ガイドンス、絵本の読み聞かせ、ブックトーク、ストーリーテリングなどを行っています。

また、カウンターで小学生の保護者の方より、「明日、学校で読み聞かせがあるのですが、5分で読めるいい本はないですか」という問い合わせが非常に増えました。そこで読み聞かせをする方に向け、本や持ち方のアドバイスや読み聞かせに向く本を紹介する「絵本読み聞かせ入門講座」を開いています。

― 図書館で働く中でやりがいを感じることを教えてください。

自分が本好きなので、本を求めている人に的確に渡せたときは、とてもうれしいです。一昨日も、ある分館の職員から、利用者が探している絵本についてヘルプを求める電話がかかってきました。A4サイズのクリスマスの絵本で、大雪が降り、多くの女の子たちが歌を歌っている表紙の、いろいろな国の賛美歌を紹介する本を探していて、市内の他の図書館から取り寄せた記憶があるとのことでした。調べてみると、すぐに見つかり、正解だったという連絡がありました。実際のその絵本の表紙は、クリスマ

スカラーの緑色ではなく青っぽい色で、大雪も降っていませんでした。利用者が探しているものを私が見つけられたときは、とてもうれしいです。

一 逆に苦労しているところを教えてください。

子どもの場合は、この本でなければ駄目だということが多くあります。例えば、この間、借りた恐竜の本が借りたのに、その本は貸出中で借りられないということが、しょっちゅうあります。そのときはこちらの恐竜の本もいいのではないかと薦め、なるべく手ぶらで帰さないようにしています。インターネットで予約し、まとめて借りて、すぐに帰ってしまう方も多いです。図書館を利用する人は、自分の好きな本棚に行くことが多いと思います。展示をし、地味ではあるものの良い本を紹介すると、このような本があったのかという発見が生まれます。本との出会い、そのような場を作っていきたいと思っています。

一 現在の1日の仕事の流れを話してもらおうと、在校生にとって参考になると思います。

昨年、『司書の日』^{注)}という本が出ました。この本の舞台は多摩平図書館です。火曜日から金曜日までは8時半に出勤し、5時15分までの勤務です。週1回の夜当番のときは、10時15分から夜7時までの勤務になります。それに加え、土日出勤が3週間に1回、まわってきます。祝日は当番制で出勤です。土曜、日曜、祝日はずっとカウンター業務です。朝、出勤すると、夜間にブックポストに返された本を回収します。私たちの図書館は、月曜日に人がいないので、火曜日には、ブックトラック3、4台分の本が返されてきます。(本の中)をチェックしてから、返却処理をし、本棚に返します。返本と書架整理の後にミーティング、10時に開館します。火曜日の朝が最も混みます。昼休みを交代で取り、ノンストップで午後の業務が始まります。貸出、返却、返本、窓口での利用者登録、リクエストなどの受付といった業務です。日野市の図書館に入っていない本を、都内の他の図書館や国会図書館から借りることもあります。頼まれたときには諦めず、使えるツールは全て使います。利用者から忙しそうと思われることが非常に多く、それが多摩平図書館の課題だと思っています。空いている時間はなるべく書架を歩き、声を掛けてもらえるように心掛けています。書架で

本を返しているときでも、「ごめんなさい、忙しいところいいですか」と必ず言われてしまうので、もう少しゆとりを持ちたいと思っています。多摩平図書館の中の書庫の整理もあります。市内の図書館では保存する本の分野を分担し、書庫の本も動いていきます。

私たちの図書館では、水曜日に週1回の選書会議をしています。各館の担当が集まり、自分たちの図書館ではこの本を買う、予約がたまっているので追加の注文を出す、あるいは予約が入ったものの、図書館として購入したほうがいいのかどうかということ、ここで判断します。限られた予算の中でリクエストにも応えなければいけません。そのため、選書会議では、各館が頭を悩ませています。カウンターでの情報収集が大事で、選書の段階でもその情報が役立ちます。

一 最後に在校生へのメッセージをお願いします。

私は長らく図書館で働いてきて、資料を渡せることがとてもうれしく、喜びを感じています。図書館の仕事として、場の提供や、従来の業務とは異なるいろいろな企画をしなければいけないと思っていた時期がありました。そのときに新型コロナウイルス感染症が流行し、私たちの図書館も臨時休館をせざるを得なくなりました。臨時休館が明けた後に、当時の館長の発案で、本や読書に関する思いのアンケートを取りました。アンケートに書かれた声を読み、いつも図書館が開いていることが非常に大事であると気付きました。図書館の仕事がとても面白いと、あらためて思うようになりました。

これから図書館を目指す方も多いと思います。毎日、発見があり、楽しい仕事なので、ぜひ頑張ってください。私は図書館に就職が決まったときに、恩師に、就職するまでの間に何をしたらいいのかを相談しました。その恩師から、「自分の足でいろいろなものを見てきなさい、出掛けてきなさい」と教えていただきました。私は図書館で働きたいと思ったときに、いろいろな人と触れ合える公共図書館がいいと思いました。自分で見たものは、説明するときの熱量が違うと思っています。どの仕事もそうであるように、いろいろな経験をするのもいいと、あらためて思っています。

(構成：須賀千絵)

注) WILL こども知育研究所 編著『司書の日』保育社,2022,79p.



卒業生の著作紹介

中西信子 『架け橋』

摇篮社 2022年

実践女子短期大学の卒業生（1959年卒）である中西信子さんが、エッセイ集を出版されました。エッセイには、中西さんが長きにわたって運営されてきた子ども文庫（家庭文庫）の活動や子ども文庫での温かな交流の記憶、絵本とお話（ストーリーテリング）の話題が綴られています。子ども文庫とは、個人やグループが自主的に自宅などで運営する子どものための小さな図書館です。この本は、近年は減少傾向にある子ども文庫について、活動の実際や裏方の苦労などを教えてくれる貴重な資料にもなっています。中西さんは、石井桃子さんの著書『子ども図書館』を読んだことをきっかけに、1972年に「なかにし文庫」（その後「つくしんぼ文庫」）を始められました。子ども文庫を開設している人たちの集まりである「よこはま文庫の会」にも積極的に参加し、子どもの本についての勉強を重ねられたといいます。横浜で開設されたつくしんぼ文庫は、別府や久留米などへの転居に伴って場所を移しながら、2012年まで、実に40年もの間続けられました。

『架け橋』と名付けられたこの本には、最近10年に書かれたエッセイが収録されています。子ども文

庫という場で生まれた地域の子どものたちとの交流、ご家族の支え、そして文庫の卒業生とのつながりといった、まさに“架け橋”といえるエピソードが描かれており、読んでいて温かな気持ちになります。多くの写真も掲載され、エッセイの内容を彩っています。

（文責：橋詰秋子）



塚原博先生の遺作『児童サービス論』

(ミネルヴァ書房)

安藤 友張 (大学図書館学課程主任)

本学在職中に塚原博先生が急逝されて、5年の歳月が経過した2023年4月、先生の遺作『児童サービス論：地域とつながる公共図書館の役割』（ミネルヴァ書房）が刊行されました。以下、刊行に至るまでの主な経緯及び本書の内容を紹介させていただきます。

生前の塚原先生は、司書資格科目「児童サービス論」の教科書を単著で刊行するため、執筆活動に鋭意従事されていました。先生は、本学における教育活動以外に、学外では図書館協議会の委員長を務めるなど、社会的活動で御多忙な日々を送られておりました。急逝される直前の時期、本学図書館学課程50周年記念誌の原稿執筆と重なり、塚原先生は不眠不休の日々を送られていたと思われまします。塚原先生から、当時の私宛に届けられた電子メールの送信履歴がそれを裏付けます。

本書は塚原先生にとっては初めての単著であり、児童サービスを長年研究された集大成というべき教科書です。完成に向けての執筆が順調に進んでいたにも関わらず、塚原先生は2018年2月に急逝されました。先生にとっては、さぞかし無念だったに違いありません。その後、監修者の山本順一先生が本書を補筆して下さる先生方（伊香左和子先生など）を探して下さり、今回の刊行に至った次第です。

以下、本書の内容を紹介します。総頁数は301頁であり、市販の他社発行のテキストと比較しても重厚な教科書（図書）です。全体構成としては、資料論（児童資料）とサービス論に分かれています。日本の公共図書館における児童サービスの歴史（換言すれば、児童図書館の歴史）も叙述されていますが、アメリカのそれにも言及されています。塚原先生は、アメリカで修士号を取得されていることもあって、本書では同国のライブラリアンシップを学ぶこと

ができます。監修者の山本先生もコラムにおいて、アメリカの図書館事情等をわかりやすく紹介されています。比較図書館情報学という視点もふまえつつ、執筆されているのが本書の特徴です。

第15章「児童図書館（情報）学教育と研修」において、塚原先生の児童図書館員養成に関する持論が詳しく叙述されています。本学の司書課程においては、必修科目「児童サービス論」（2単位）を「児童図書館サービス論 a」「児童図書館サービス論 b」の2科目4単位として開講しております。「図書館サービス特論」を児童サービス論として位置付け、児童図書館員の養成を主眼としております。これは本学の司書課程の特徴です。

最後になりましたが、監修者の山本先生、編著者の伊香先生、補筆して下さった先生方、そして発行元のミネルヴァ書房の本田さんに深く感謝申し上げます。塚原先生も草葉の陰できっと喜んでおられることと存じます。



合格体験記 (東京都・司書)

大学院在学時に司書課程を履修したY・Tさん(2023年3月大学院修了)は、東京都の採用試験に合格し、現在、都立図書館に司書として勤務なさっています。公務員試験合格までの貴重な体験を寄稿していただきました。

私は東京都の採用試験に合格し、都立中央図書館に勤務しております。都立図書館に所蔵される資料を分類に分け、請求記号を付与する仕事を担当しております。

まず、司書という職種を選んだ理由についてお話します。私は、社会情勢が不安定な現代においても、安定した職に就きたいと考え、公務員という職種を目指すことに決めました。その中でも、司書を選択した理由ですが、図書館・図書室が「第三の場」であったためです。高校時代に不登校になった生徒が図書室登校を通して回復する姿を見て、図書室は教室や自宅とは違う、生徒にとっての安心できる新たな場所になりうることを知りました。そうした居場所作りをする仕事に就きたいと考え、司書を志望するようになりました。

次に、試験対策として実施したことをお伝えさせていただきます。9月にあった1次試験の筆記試験のために「教養試験」と「専門試験」の勉強を行いました。公立図書館は各自治体が管轄しているため、自治体採用試験の「教養試験」対策として公務員予備校に約3年間通いました。「教養科目」として、人文科学や社会科学等、様々な分野を学びましたが、中でも時間をかけたのは「数的処理」という分野です。「数的処理」は「教養試験」において出題数が多いうえ、多数の解法パターンを覚えて応用できるようにする必要があります。毎日5問は問題集を解く生活を続けました。「専門試験」では、司書課程で学んだことが問われるため、大学の授業で使用した教科書や資料を読み込むとともに、『司書もん』^{注1)}を活用して学びました。私は大学院に進学してから司書課程を受講したため、司書課程の学習と並行して「専門試験」の学習に挑んでいきました。そのため、『司書もん』にとりかかったのは、採用試験の半年ほど前でした。『司書もん』では、短時間で回数をこなせるよう、主に解答・解説部分を活用して学習を進めていきました。解答・解説のキーワードとなる部分を暗記用ペンと赤シートで隠し、何度も繰り返し読むようにしていました。時には問題を見て、解答のキーワードだけを書き出す等、隙間時間を活用していました。ただ、『司書

もん』は記述式の問題集であったため、実際に何個か採用試験を受けてみて、東京都のような記述式の問題には適していましたが、選択式の問題を採用している自治体とはあまり相性が良くなかった印象です。

10月にあった2次試験の面接対策では司書課程の須賀先生に大変お世話になりました。公務員予備校では一般的な事務職の面接には対応していても、司書のような専門職の面接練習は行っていなかったため、急遽須賀先生に相談をしました。もちろん、学チカ^{注2)}等の自分自身に関することについての質問への回答練習は大学院1年の5月頃から始めていました。ですが、都立図書館に対応した面接練習を始めたのは1次試験の合格が発表されてからだったため、須賀先生には大変ご迷惑をおかけしてしまったと感じています。約2週間という短い期間に3~4回ほどの面接練習の機会を設けていただき、都立図書館が東京都の図書館全体において、どのような立ち位置にいるのか等を詳しくご指導いただきました。そのおかげもあり、面接官から「都立図書館について、よく理解されていますね」とほめていただくことができました。

また、面接においては、自分らしさを発揮するために、面接を面接官との会話と考え、会話を楽しむように心がけていました。緊張を少しでも和らげるために、面接ではなく社会人と会話をしに行くというような認識で面接に臨むようにしていました。公務員予備校での一般的な面接練習に加えて、6月頃から始まる各自治体の事務職の採用試験を受験し、実際の面接を多数経験するようにしていました。採用後、職場で面接官の方にお会いした際、「とても楽しく会話できたのが印象的で私の一推しはあなただった」というようなお言葉をいただくこともでき、とても嬉しかったです。どれだけ良い回答を用意していても、緊張で力を発揮できないと悔しい思いをしますので、しっかり準備して臨むことをお勧めいたします。

注1) 図書館職員採用試験対策問題集。後藤敏行『司書もん』第2版。図書館メディア研究会、2020、3巻。

注2) 学生時代に力を注いだこと。就職活動における用語。

学校司書の養成を めぐって

安藤 友張（大学図書館学課程主任）

昨年（2023年）は、学校図書館法の制定・公布70周年という記念すべき年でした。新聞などのマス・メディアで学校図書館や学校司書が取りあげられる機会が多かったです。

本学図書館学課程では、2018年度に「学校司書コース」を開設しました。2019年度入学生から、文部科学省の「学校司書のモデルカリキュラム」に準拠した学校司書の養成を開始しました。2022年3月に、「学校司書コース」の第1回の修了者が誕生しました。

学校司書と司書教諭の違いですが、本誌の多くの読者の方々は正確に理解されていると思います。しかし、この両者の違いに関して、新聞記者など、図書館関係者以外の方々に説明する際、混同されてしまうことが非常に多いのです。可能な限り、わかりやすい表現を用いながら、私はいつも説明するのですが、正確に理解していただけないので非常に苦労します。

日本の学校図書館に配置されている職員は、「図書館の先生」と呼ばれることが多いです。児童・生徒から見れば、学校司書も司書教諭も「図書館の先生」であり、この両者を峻別できないのです。

学校司書は英語訳すると、school librarian です。一方、司書教諭は teacher librarian です。司書教諭は teacher なので、子どもを指導し、教育・学習活動を通して学校図書館の利用を促すのが主な任務です。学校司書は teacher ではないので、教員免許を必要としません。また、学校司書は学校図書館の様々なサービスを通して、利用者（子どもや教員）を支援します。学校司書には、子どもの学習活動（学力）を評価する権限がないため、「指導」ではなく、「サービス」「支援」という表現が適切です。

司書教諭は兼任であることが非常に多く（特に公立学校）、図書館以外の様々な仕事を兼務しなければなりません。教員ではない学校司書は図書館の仕事に専念できます。ただし、常勤職員ではなく、非常勤職員という場合が多いのです。特に、公立の小学校・中学校に配置されている学校司書は、そのような傾向が顕著です。ちなみに、私立の場合、専任の司書教諭が配置されてい

る学校もあります。

日本における学校司書は多種多様です。専門職（school librarian）という位置づけと同時に、非専門職（school library assistant）の場合も見受けられます。地方自治体の要綱・規程等で定められた、「学校司書」「学校図書館補助員」「学校図書館教育補助員」「読書活動支援員」等々の職名がそれを如実に示しています。

戦後日本では、1953年に学校図書館法が成立し、司書教諭の養成が開始されました。しかし、同法附則の条項「当分の間、司書教諭を置かないことができる」により、司書教諭の配置がなかなか進みませんでした。1997年の法改正により、12学級以上の学校には、司書教諭の配置が義務化されました。

戦後日本における学校図書館の歴史を振り返ってみると、司書教諭未配置の学校が多数を占める時期が長く続きました。そのような暗黒の時代に、学校司書と呼ばれる方々が学校図書館を支えてきました。司書教諭の配置が進んだ現在でも、学校司書の果たす役割は大きいと思います。

2014年の学校図書館法改正によって、学校司書の法制化が実現しました。長い間、学校司書は法的根拠が全くない学校図書館職員だったのです。

冒頭で述べた文部科学省の「学校司書のモデルカリキュラム」に準拠した学校司書の養成ですが、始まったばかりです。学校司書の求人ですが、全国各地の地方自治体の募集要項を見ると、司書資格を要求する場合は圧倒的多数を占めます。「学校司書のモデルカリキュラム」の修了者を応募資格として求める地方自治体が増えるには時間がかかりそうです。

本学図書館学課程では、司書課程と学校司書コースの併修（同時履修）を推奨しています。例えば、神奈川県や埼玉県では、県立図書館に採用・配置された後、県立高校の学校図書館への異動を命じられる場合があります。公立図書館（公共図書館）でも学校図書館でも、館種を問わず、柔軟に対応できる司書の養成が求められています。

（付 記）

2024年3月発行予定の『実践女子大学文学部紀要』第66集において、文部科学省の「学校司書のモデルカリキュラム」に関連する学術論文が掲載されます。当該論文は、安藤を筆頭著者とした3名の大学教員で執筆しました。これは科研費による研究成果の一部です。

【卒業生】

愛甲晴美「千歳倶楽部と下田歌子の関わりに関する一考察 一岐阜県恵那市岩村町における新出資料の下田歌子書幅と千歳倶楽部に関する調査」『実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所 年報』(9), 2023, p.23-38.

大作光子「そして、バトンを渡される」『図書館雑誌』117(12), 2023, p.728.

大作光子「『レファレンス』が拡張するとき」『図書館雑誌』117(8), 2023, p.440.

大作光子「道具の手渡し方」『図書館雑誌』117(4), 2023, p.180.

中西信子『架け橋』揺籃社, 2022, 222 p.

【教員：非常勤・専任】

今村成夫「新書本の主題範囲(3): 年間の傾向について」『大正大学研究紀要』(107), 2022, p.103-118.

小池由美子「教員政策と長時間労働：管理強化と一体の多忙化」『教育』(932), 2023, p.38-45.

小池由美子「高大接続『改革』とキャリア教育：政策分析と進路指導に関する一考察」『教職課程センター紀要』(7), 2022, p.7-16.

小池由美子「学力崩壊を引き起こす国語新科目の迷走：観点別評価が招く矛盾と混乱」『教育』(921), 2022, p.71-79.

近藤牧子, 荻野亮吾, 田中治彦, ニノ宮リム さち, 岩本泰, 湯本浩之「持続可能な地域の形成条件に関する事例研究(2): 札幌市におけるESD・SDGs推進体制を事例にして」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』(7), 2023, p.234-250.

近藤牧子「SDGsに応える社会教育：アクティブシティズンシップ涵養の観点から」『社会教育学研究』(59), 2023, p.100-102.

近藤牧子「CONFINTEAⅦに向けた市民社会からの発信とアクティブ・シティズンシップ」『開発教育』(69), 2022, p.125-130.

近藤牧子「第7回ユネスコ国際成人教育会議に向けた市民社会組織によるアドボカシーの組織化過程」『日本公民館学会年報』19(0), 2022, p.118-125.

白戸満喜子「竹紙の本質：魂をつなぐ紙」『日本古書通信』88(11), 2023, p.4-5.

新藤透「『斯民』に掲載された図書館関係記事の検討」『日欧比較文化研究』(27), 2023, p.41-63.

新藤透「日本の図書館事始：日本における西洋図書館の受容」三和書籍, 2023, 321 p.

新藤透「小松原英太郎文相の通俗図書館認識と通俗図

書認定制度について」『The Basis：武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』(13), 2023, p.139-154.

新藤透「蠣崎正広謀叛に関する一考察」『北海道の文化』(95), 2023, p.27-37.

新藤透「明治後期の図書館関係法令からみる政府の図書館観：帝国図書館官制・図書館令・小松原訓令を中心に」『日欧比較文化研究』(26), 2022, p.53-86.

新藤透「新潟市の積善組合巡回文庫の再考察」『図書館総合研究』(22), 2022, p.1-45.

松本美智子「私の青春の1冊 悩み多き青春時代に[『車輪の下』ヘルマン・ヘッセ・著 岩淵達治・訳]」『学校図書館』(875), 2023, p.75

村上篤太郎「理系司書の養成：東京農業大学の場合」『日本農学図書館協議会誌』(211), 2023, p.1-9.

村上郷子「専門図書館の現状を探る：大学生による現地調査をてがかりに」『法政大学資格課程年報』(11), 2022, p.5-15.

吉澤小百合「探究学習の実施における日本の高等学校の学校図書館と学校図書館職員の現状と課題」『日本図書館情報学会誌』69(2), 2023, p.101-119.

谷口祥一, 橋詰秋子「NCR2018の規定間参照関係の実態把握とネットワーク分析の適用」『日本図書館情報学会誌』68(4), 2022, p.233-251.

橋詰秋子「アメリカの図書館はコミックをどのように組織化しているのか」『実践女子大学短期大学部紀要』(44), 2023, p.91-102.

Shoichi, Taniguchi; Akiko, Hashizume.

Transforming metadata content guidelines and instructions to linked data. Journal of Information Science, 2023, <https://doi.org/10.1177/01655515221142428>

須賀千絵「メジャー政権下の英国公共図書館政策」『実践女子大学文学部紀要』(65), 2023, p.63-81.

須賀千絵「公共図書館閉館に抗議する英国の住民運動の展開：Lincolnshireの事例の分析」『日英教育研究フォーラム』(27), 2023, p.55-69.

須賀千絵・汐崎順子「新型コロナウイルス感染症感染拡大第1波期間における公立図書館の児童サービス」『日本図書館情報学会誌』69(4), 2023, p.169-185.

汐崎順子編『子どもの読書を考える事典』朝倉書店, 2023.5, 496 p. 橋詰秋子「社会教育としての図書館」, 須賀千絵「図書館でのさまざまな取り組み」, 白戸満喜子「子どもの本の素材と多様性」

JLSニュースレター No.15

2024年3月1日 Jissen Librarianship の会

編集・発行：実践女子大学図書館学課程／実践女子大学短期大学部図書館学課程

〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49 e-mail: lis@jissen.ac.jp